



TITLE:

多義語haveのネットワークモデル-- 認知言語学的観点から

AUTHOR(S):

宋, 昌代

CITATION:

宋, 昌代. 多義語haveのネットワークモデル--認知言語学的観点から. 言語科学論集 2006, 12: 35-56

ISSUE DATE:

2006-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/88056>

RIGHT:

多義語 *have* のネットワークモデル

—認知言語学的観点から—

宋 昌代

(ソン・チャンデ)

京都大学

haj96610@yahoo.co.jp

1. はじめに

本稿では、英語動詞 *have* の多義性について、本動詞用法を中心に認知言語学的枠組みから参照点構造を用いて分析する¹。*have* の本動詞用法には、次のような事例が見られる。

- (1) a. She has a knife in her hand. (物理的所持)
- b. He has blue eyes. (身体部分)
- c. I have a sister. (親族関係)
- d. He has a world record in marathon. (抽象的所有)
- e. The table has four legs. (全体・部分)
- f. The box has an apple in it. (包含関係)
- g. We have the sea on our left. (位置関係)

(1)に見られるように、*have* は、物理的な所持をあらわすだけでなく、身体部分、親族関係、位置関係をあらわすなど、その意味は広範囲にわたる。英語動詞 *have* の研究に中右(1998)があるが、その研究手法は、*have* の事例を一つずつ提示し、それぞれがどのような意味で用いられているのかについての記述レベルの分析にとどまっている。それゆえ、*have* のそれぞれの意味間にどのような関係があり、*have* の意味がいかにして拡張していったのかという問いに対しては、答えられることはなかった。

本稿では、参照点構造から *have* の分析を行った Langacker(1993, 1995)のモデルに修正を加え、個別事例までを網羅するスキーマを提示しながら、*have* の多義性について考察する。そして、*have* の多義性が認知的なさまざまなメカニズムによって動機づけられているということ、それぞれの意味の間にある関係がネットワークカテゴリーをなしているということを明らかにする。まずは、次節で Langacker(1993, 1995)の参照点による *have* の分析を概観し、その問題点を指摘する。

2. 先行研究における *have* の分析: Langacker(1993, 1995)

認知言語学的な観点から *have* の分析を行っている先行研究に、Langacker(1993, 1995)がある。Langacker(1993, 1995)は、多義語である *have* の表面にあらわれる意味を見るだけでなく、参照点構造を用いることによって統合的な視点から分析を行い、以下のように図式化している。

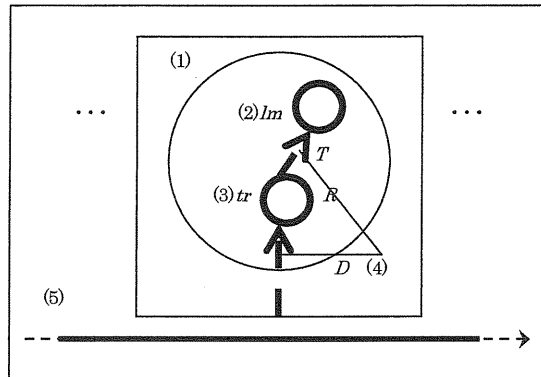


図-1: Langacker(1995: 6)

図-1において、サークル(1)は *have* の主語の支配領域、サークル(2)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)、サークル(3)は *have* の主語(参照点ないしトラジェクター)、破線矢印(4)はメンタルパス、実線矢印(5)は時間のスケール、太線はプロファイルを、それぞれあらわしている。しかし、Langacker(1993, 1995)の分析では、主語名詞句を参照点としてアクセスできるターゲットの可能性を決定できるのが主語名詞句のみであり、目的語名詞句に対する検討はなされていない。それゆえ、次のような例が容認されないことに関して説明を与えることができないのである。

(2) *The Big Dipper has the North Star.

それゆえ、*have* の特徴を捉えるには、主語名詞句に着目するだけではなく、主語と目的語の関係から目的語名詞句に対しても詳細な規定を与える必要がある。

本稿では、このような問題を解決するために、*have* の解釈に関わる背景知識、すなわちドメインを検討することで、主語名詞句と目的語名詞句の間にどのような関係があるかを探り、*have* の内実を明らかにする。その上で、Langacker(1993, 1995)の参照点構造による *have* のスキーマを修正し、スキーマ、プロトタイプからの拡張を含む *have* の語彙ネットワークを提示する。

3. 本稿における *have* の分析: *have* の解釈にかかわるドメイン

動詞 *have* の解釈には複数のドメインがかかわっている。ここで言うドメインとは、ある語の意味を概念化する際に必ず前提として要求される別の概念の集合を指す。Langacker(1987a: 147)によれば、認知ドメインとは「意味的な単位の性格づけが行われる文脈」である。もっとも基本的なドメインには、空間と視覚、温度、味、圧力、痛み、色があるが、認知単位には「空間」や「温度」、「色」の基本ドメインに基づいて規定することができないものも存在する。Langacker(1987a: 185)は、例として UNCLE「叔父」をあげている。この定義に関わってくるのは人物、性別、誕生、ライフサイクル、親子関係、兄弟姉妹関係である。これらを考慮することにより、「叔父」という概念が理解できるのである。Langacker の認知ドメインという概念には、抽象的なドメインも含まれ、動詞 *have* を解釈する際にもさまざまなドメインがかかわっているのである。

本稿では、*have* の解釈にかかわるドメインには三種類あると考える。一つめは、主語(として言語化されたもの)とは別のものの支配領域から主語(として言語化されたもの)の支配領域へ目的語(として言語化されたもの)が移動する場合である。本稿ではこれを「獲得ドメイン」と呼ぶことにする。二つめは、目的語が複数の支配領域間を移動することなく、主語の支配領域にもともと備わっている場合であり、これを「既存ドメイン」と呼ぶことにする。三つめは、主語がその支配領域内で目的語をうみ出す場合であり、これを「産出ドメイン」と呼ぶことにする。

3.1. 「獲得ドメイン」における *have*

獲得ドメインには、二重目的語構文の解釈の背景にあるモノの譲渡が関わっている。Langacker(1990a: 14)は、以下のような二重目的語構文の例を挙げている。

(3) Bill sent Joyce walrus.

さらに、Langacker は(3)の例を以下のような認知図式であらわしている。

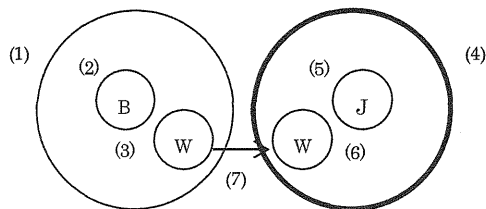


図-2: Langacker(1990a: 14)

図-2において、サークル(1)はもとの所有者の支配領域、サークル(2)はもとの所有者(Bill)、

サークル(3)はもとの位置における所有物(*walrus*)、サークル(4)は後の所有者の支配領域、サークル(5)は後の所有者(*Joyce*)、サークル(6)は後の位置における所有物(*walrus*)、実線矢印(7)は所有物の移動経路を、それぞれあらわしている。

本稿では次に挙げる例を獲得ドメインにおける *have* の事例とみなし、Langacker(1995: 6)の参照点構造を用いた *have* の図式に、モノの移動をあらわす図-2を加えることによって、以下のような図式を提案する。また、獲得ドメインにおける *have* は獲得をあらわす動詞 *get* との置き換えや *give* を用いた二重目的語構文との書き換えが可能である。

- (4) a. He {has/ has got} two cars.
b. She gave him two cars.

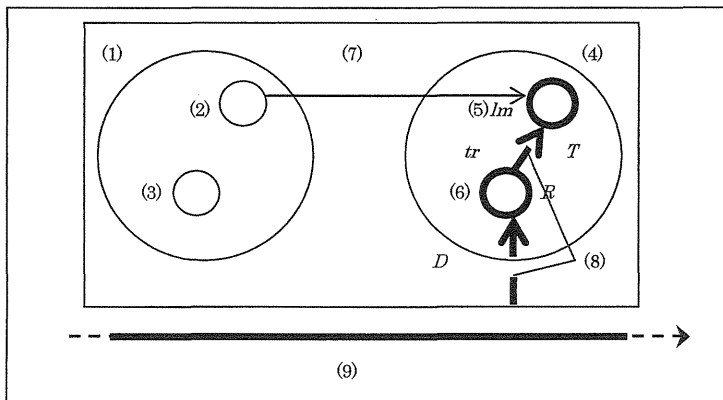


図-3

図-3において、サークル(1)はもとの所有者の支配領域、サークル(2)はもとの位置における *have* の目的語(*two cars*)、サークル(3)はもとの所有者(*she*)、サークル(4)は *have* の主語の支配領域、サークル(5)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*two cars*)、サークル(6)は *have* の主語(参照点ないしトラジェクター)(*he*)、実線矢印(7)は目的語の移動経路、破線矢印(8)はメンタルパス、実線矢印(9)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

また、獲得ドメインがかかわる *have* には、上で挙げた事例の他にも次の表1に示すような分類基準をもつ事例(表2参照)が存在する。

表1: 獲得ドメインにおける *have* の事例の分類基準

<主語の特性>	
・ (A): 主語が有生物(animate entity: A)である	
・ (IA): 主語が無生物(inanimate entity: IA)である	
・ (IAM): 主語が無生物であるが、メトニミー拡張により有生物として解釈される (inanimate entity (metonymy): IAM)	
<目的語の特性>	
・ (CO): 目的語が具体物(concrete thing: CO)である	
・ (AB): 目的語が抽象物(abstract thing: AB)である	
・ (AN): 目的語が有生物(animate entity: AN)である	
<主語と目的語の接触状態>	
・ (T): 目的語に接触(touch: T)している	
・ (NT): 目的語に接触していない(not touch: NT)	
<目的語の譲渡可能性の有無>	
・ (AL): 目的語が譲渡可能 ² である(alienable: AL)	
<主語と目的語の時間的關係>	
・ (TP): 一時的である(temporal: TP)	
・ (ATP): 永続的である(atemporal: ATP)	
<その他>	
・ (TR): 目的語の移動経路がプロファイルされる(transfer: TR)	
・ (IC): 内在的な要因が前景化している(internal cause: IC)	

表2: 獲得ドメインにおける *have* の事例

区分	スキーマの特徴	例文
A	A-CO-T-AL-TP	Be careful—She {has/ has got} a gun (in her hand)!
B	A-CO-NT-AL-TP	We have the sea on our left.
C	A-CO-NT-AL-ATP	He {has/ has got} two cars.
D	A-CO-NT-AL-ATP-TR	I {had/ got} a letter ?(from him).
E	A-AB-AL-ATP	We {have/ have got} a right to refuse the proposal.
F	A-AB-AL-ATP-IC	The woman {has/ has got} a bad reputation.
G	A-AN-T-AL-TP	The boy {has/ puts} a parrot on his shoulder.
H	A-AN-NT-AL-TP	We cannot {have/ invite} so many visitors at home.
I	A-AN-NT-AL-ATP	No shopkeeper will not {have/ employ} him.
J	IAM-CO-T-AL-TP	Be careful—That red cap {has/ has got/ bought} a gun

		(in her hand)!
K	IAM-CO-NT-AL-TP	Look — That red cap has the sea on his left.
L	IAM-CO-NT-AL-ATP	That red cap {has/ has got} two cars.
M	IAM-CO-NT-AL-ATP-TR	That red cap {had/ got} a letter ?(from him).
N	IAM-AB-AL-ATP	Any fraternity {has/ has got} a constitutional right to refuse to accept persons it dislikes.
O	IAM-AB-AL-ATP-IC	The hotel {has/ has got} a bad reputation.
P	IAM-AN-T-AL-TP	The red cap {has/ puts} a parrot on his shoulder.
Q	IAM-AN-NT-AL-TP	That red cap cannot {have/ invite} so many visitors at home.
R	IAM-AN-NT-AL-ATP	That red cap will not {have/ employ} him.
S	IA-CO-T-AL-TP	The table has some maps on it.
T	IA-AN-T-AL-TP	This hall has a hundreds of people in it.
U	IA-AN-NT-AL-ATP	The team {has/ has got} many good players.

3.2. 「既存ドメイン」における *have*

既存ドメインにおいては、主語と目的語の間に全体・部分の関係が成り立つため、参照点と支配領域が一致する。また、既存ドメインにおける *have* は *get* との置き換えや *give* を用いた二重目的語構文との書き換えが不可能である。

(5) a. He {has/ *has got} blue eyes.

b. *She gave him blue eyes.

(5)を図式化したものは、以下のとおりである。

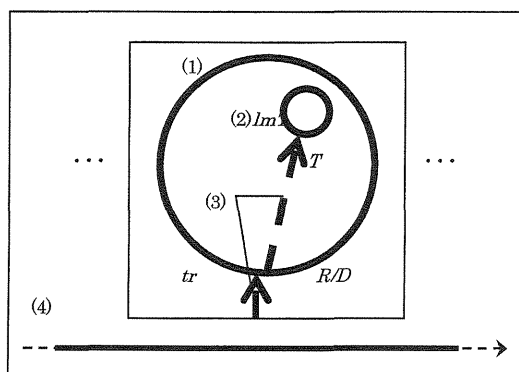


図-4: Langacker(1995: 74)

図-4において、サークル(1)は *have* の主語かつ支配領域(参照点ないしトラジェクター)(*he*)、サークル(2)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*blue eyes*)、破線矢印(3)はメンタルパス、実線矢印(4)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

また、既存ドメインがかかわる *have* には、上で挙げた事例の他にも次の表3に示すような分類基準をもつ事例(表4参照)が存在する。

表3: 既存ドメインにおける *have* の事例の分類基準

<主語の特性>	
・ (A): 主語が有生物(animate entity: A)である	
・ (IA): 主語が無生物(inanimate entity: IA)である	
・ (IAM): 主語が無生物であるが、メトニミー拡張により有生物として解釈される(inanimate entity (metonymy): IAM)	
<目的語の特性>	
・ (CO): 目的語が具体物(concrete thing: CO)である	
・ (AB): 目的語が抽象物(abstract thing: AB)である	
・ (AN): 目的語が有生物(animate entity: AN)である	
<主語と目的語の接触状態>	
・ (T): 目的語に接触(touch: T)している	
・ (NT): 目的語に接触していない(not touch: NT)	
<目的語の譲渡可能性の有無>	
・ (IAL): 目的語が譲渡不可能である(inalienable: IAL)	
<主語と目的語の時間的關係>	
・ (ATP): 永続的である(atemporal: ATP)	

表4: 既存ドメインにおける *have* の事例

区分	スキーマ的特徴	例文
A	A-CO-T-IAL-ATP	He {has/ *has got} blue eyes.
B	A-AB-IAL-ATP	She {has/ *has got} a good memory.
C	A-AN-NT-IAL-ATP	He {has/ *has got} a brother.
D	IAM-CO-T-IAL-ATP	That red cap {has/ *has got} blue eyes.
E	IAM-AB-IAL-ATP	That red cap {has/ *has got} a good memory.
F	IAM-AN-NT-IAL-ATP	That red cap {has/ *has got} a brother.
G	IA-CO-T-IAL-ATP	The table {has/ *has got} four legs.
H	IA-AB-IAL-ATP	This book {has/ *has got} five missing pages.

3.3. 「産出ドメイン」における *have*

産出ドメインの背景には、主語から目的語へのアクション・チェーン(action chain)が存在する。このアクション・チェーンにおけるエネルギーの流れを図式化したものがLangacker(1990b)のビリヤード・モデルであり、外界での事態を認知的に理想化して捉えている。例えば、Andrea が Floyd に何らかの形で働きかけ、Floyd が hammer を glass に投げつけ、当たった glass が粉々に割れてしまったという連鎖的事態は、以下の図のようになる。それぞれのサークルは参与者、二重線の矢印はエネルギーの伝達、右端のサークルは参与者の状態変化をあらわす。

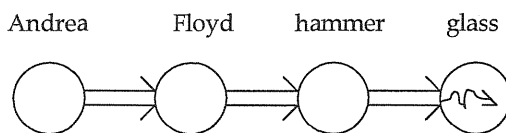


図-5: Langacker(1990b: 219)

本稿では、産出ドメインには参照点構造だけでなく、このような主語から目的語への物理的(ないし心理的)なエネルギーの流れが背景にあると考える。また、産出ドメインにおいては、主語と目的語の間に全体・部分の関係が成り立つもの(目的語が譲渡不可能なもの)と、主語と目的語の間に全体・部分の関係が成り立たないもの(目的語が譲渡可能なもの)の二種類がある。獲得ドメインと同様、その図式において参照点と支配領域が一致しないものが后者である。一方、既存ドメインと同様、参照点と支配領域が一致する形をとるものが前者である。本稿では、以下の例を産出ドメインにおける *have* の事例とみなし、Langacker(1995: 6)の参照点構造を用いた *have* の図式にアクション・チェーンをあらわすビリヤード・モデルを加えることによって、以下のような図式を提案する。また、産出ドメインに関わる *have* は、目的語の産出をあらわす *make* や *establish* などの動詞との置き換えが可能である。

一つめに、全体・部分の関係が成り立たない事例とそれを図式化したものは以下のとおりである。

- (6) a. He {has/ makes} many excellent works.
- b. He {has/ makes/ establishes} a company.

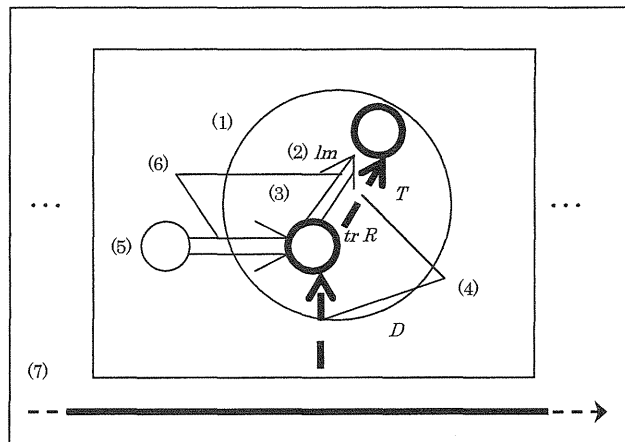


図-6

図-6 において、サークル(1)は *have* の主語の支配領域、サークル(2)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*many excellent works, a company*)、サークル(3)は *have* の主語(参照点ないしトラジェクター)(*he*)、破線矢印(4)はメンタルパス、サークル(5)はアクション・チェーンの始点(要因)、二重線矢印(6)はエネルギーの流れ、実線矢印(7)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

二つめに、全体・部分の関係が成り立つ事例とそれを図式化したものは次のとおりである。

(7) He {has/ makes} a world record in marathon.

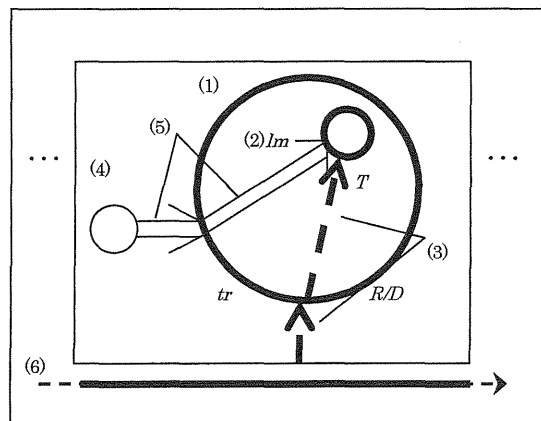


図-7

図-7において、サークル(1)は *have* の主語かつ支配領域(*he*)、サークル(2)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*a world record*)、破線矢印(3)はメンタルパス、サークル(4)はアクション・チェーンの始点(要因)、二重線矢印(5)はエネルギーの流れ、実線矢印(6)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

また、産出ドメインがかかわる *have* には、上で挙げた事例の他にも次の表 5 に示すような分類基準をもつ事例(表 6 参照)が存在する。

表 5: 産出ドメインにおける *have* の事例の分類基準

<主語の特性>	
・ (A): 主語が有生物(<i>animate entity</i> : A)である	
・ (IAM): 主語が無生物であるが、メトニミー拡張により有生物として解釈される(<i>inanimate entity (metonymy)</i> : IAM)	
<目的語の特性>	
・ (CO): 目的語が具体物(<i>concrete thing</i> : CO)である	
・ (AB): 目的語が抽象物(<i>abstract thing</i> : AB)である	
・ (AN): 目的語が有生物(<i>animate entity</i> : AN)である	
<主語と目的語の接触状態>	
・ (NT): 目的語に接触していない(<i>not touch</i> : NT)	
<目的語の譲渡可能性の有無>	
・ (AL): 目的語が譲渡可能である(<i>alienable</i> : AL)	
・ (IAL): 目的語が譲渡不可能である(<i>inalienable</i> : IAL)	
<主語と目的語の時間的關係>	
・ (TP): 一時的である(<i>temporal</i> : TP)	
・ (ATP): 永続的である(<i>atemporal</i> : ATP)	
<その他>	
・ (EC): 外在的な要因がプロファイルされる(<i>external cause</i> : EC)	

表 6: 産出ドメインにおける *have* の事例

区分	スキーマの特徴	例文
A	A-CO-NT-AL-ATP	He {has/ makes} many excellent works.
B	A-AB-AL-ATP	He {has/ makes} a big property.
C	A-AB-IAL-TP	I {have/ make} a good idea.
D	A-AB-IAL-ATP	He {has/ makes} a world record in marathon.
E	A-AB-IAL-ATP-EC	She {has/ makes} an intense hatred towards birds.

F	A-AN-NT-IAL-ATP	I {have/ make} a lot of friend.
G	IAM-CO-NT-AL-ATP	IBM {has/ makes/ produces} a machine that can understand spoken words.
H	IAM-AB-AL-ATP	That red cap {has/ makes} a big property.
I	IAM-AB-IAL-TP	That red cap {has/ makes} a good idea.
J	IAM-AB-IAL-ATP	This theater has a fixed time.
K	IAM-AB-IAL-ATP-EC	The whole official city {has/ makes} an intense hatred towards birds.
L	IAM-AN-NT-IAL-ATP	That red cap {has/ makes} a lot of friend.

以上をふまえて、次節では *have* の意味拡張について検討していく。

4. 多義語 *have* の意味拡張

多義語をモデル化したものに、スキーマによるネットワークモデルがある。スキーマとは、すべてのカテゴリーメンバーに共通する性質を抽出したものであり、いくつかの具体例を通じて、一般化、抽象化された型を言う。そして、いくつかの具体例の中から、共通する特徴を抽出することで、スキーマを得るプロセスをスキーマ化(schematization)という。スキーマは知識の抽象的な型を規定するものであるため、認知経験に基本構造を与えるものであると言える。スキーマと個々の具体例との関係は具体化(instantiation)のリンクによって結ばれている。以下の図は、山梨(2000: 181)が Langacker(1987: 383)の図における矢印を修正したものであり、実線の矢印(→)は具体化、破線の矢印(---→)は拡張、点線の矢印(.....→)はスキーマ化を、それぞれあらわしている。

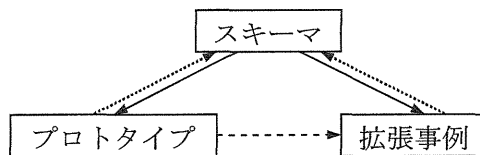


図-8: 山梨(2000: 181)

本稿では、*have* がこのようなスキーマによるネットワークカテゴリーをなしていることを主張する。

4.1. *have* のプロトタイプ

have の本動詞用法において、有生物の主語が無生物を目的語としてとるという、共時的な頻度が高い、次のような事例をプロトタイプとして位置づける³。

(8) I have a car.

このことをふまえて、次節では意味拡張の要因を具体事例とともに考察する。

4.2. 意味拡張の動機づけ

多義語である *have* の意味拡張の動機づけには、メトニミー、メタファー、主体化、前景化、アクティブ・ゾーンがある。

4.2.1. メトニミーによる拡張

have は、主語の有生・無生によって二種類に大きく分類される。しかし、無生物主語の中には、有生物として解釈されるものがある。有生物を主語にとる *have* と、有生物として解釈されうるような無生物を主語にとる *have* との間には、メトニミーによる拡張関係がある。メトニミーは、主要な比喩の一つであり、単一の領域内における近接性(contiguity)に基づく伝統的にはされてきた。例えば、「電話をとった」と言った場合、実際にとったのは、「受話器」であり、「電話」という全体で、その部分である「受話器」を指していると言える。この全体・部分関係のようなものが近接性の例である。このような認知的基盤をもつメトニミーは、メタファーと同様に広く日常言語に見られる現象であり、“*That red cap is a friend of mine.*”(あの赤い帽子を被った人は友人だ)のような発話場面に依存して解釈されるものなどにも生産的に用いられる。

4.2.2. メタファーによる拡張

have には具体物を目的語にとるものと、抽象物を目的語にとるものがある。この二つの間にあるのが、メタファーによる拡張関係である。メタファーもメトニミーと同様、主要な比喩の一つであり、伝統的には、異なる領域間の類似性(similarity)に基づくとされてきた。Lakoff and Johnson(1980)は、認知言語学におけるメタファーの先駆的な研究において、メタファーには経験的基盤があることを主張している。本稿では、目に見えない、触れない抽象物を、ある経験に基づいて、具体的な形があるものとして捉えることをメタファーによる拡張として位置づける。

4.2.3. 主体化による拡張

have には、存在の位置関係のみをあらわす用法がある。プロトタイプからこのような事例への拡張を動機づけるものが主体化である。主体化とは、客体的に把握されていたものが客体性を徐々に失い、もともと内在していた主体的な把握しか残らなくなる意味変化のことを言う(Langacker 1990c, 1999a, 1999b)。この主体化は、動詞 *have* の意味拡張にも関わっている。主体化により、直接手に取る行為や物理的な所有から抽象的な所有へ、そして存在の位置関係のみをあらわすというように、具体的な叙述内容が徐々に希薄化していく。

- (9) a. John had the baton.
 b. Be careful—he has a gun!
 c. I have an electric saw, though I seldom use it.
 d. They have a good income from judicious investments.
 e. She often has migraine headaches.
 f. We have a lot of skunks around here.

これらは、下の例にいくにしたがい、直接手に取る行為や物理的な所有から抽象的な所有へ、そして存在の位置関係のみをあらわすというように、具体的な叙述内容が徐々に希薄化している。このことは次のように参照点構造を用いて図式化される。

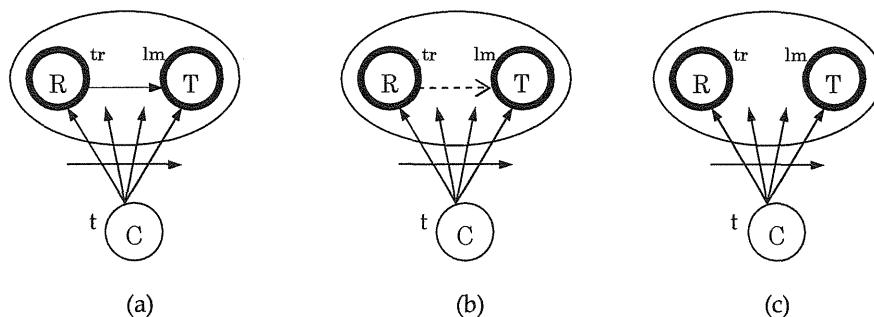


図-9: Langacker(1999b: 163)

図-9において、(a)から(c)へいくにしたがい動作主性が弱まっている、すなわち主体化の度合いが進んでいるのである。

4.2.4. 前景化による拡張

前景化とは、所与の対象・事態の一側面が注意・関心の焦点となって描かれることである。この前景化がかかわるものの一つに、獲得(A-CO-NT-AL-ATP)から獲得(A-CO-NT-AL-ATP-TR)への拡張がある。

(10) He has two cars.

(11) I had a letter from him.

(10)は獲得(A-CO-NT-AL-ATP)の事例であり、(11)は獲得(A-CO-NT-AL-ATP-TR)の事例である。(11)では、目的語の移動が意識されるため、以下の(12)ように、移動元をあらわす前置詞句のない事例は容認されにくい。それゆえ、移動をあらわす「TR(transfer)」という記号を付け加えることで獲得(A-CO-NT-AL-ATP)とは区別する。

(12) ?I had a letter.

これを認知図式にあらわすと次頁のようになる。

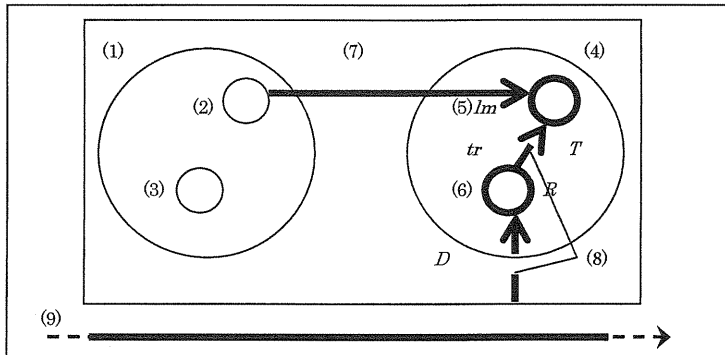


図-10

図-10 において、サークル(1)はもとの所有者の支配領域、サークル(2)はもとの位置における *have* の目的語(*a letter*)、サークル(3)はもとの所有者(*he*)、サークル(4)は *have* の主語の支配領域、サークル(5)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*a letter*)、サークル(6)は *have* の主語(参照点ないしトラジェクター)(*I*)、実線矢印(7)は目的語の移動経路、破線矢印(8)はメンタルパス、実線矢印(9)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

また、獲得(A-AB-AL-ATP)から獲得(A-AB-AL-ATP-IC)への拡張にも前景化がかかっている。

(13) We {have/ have got} a right to refuse the proposal.

(14) The woman {has/ has got} a bad reputation.

(13)は獲得(A-AB-AL-ATP)の事例であり、(14)は獲得(A-AB-AL-ATP-IC)の事例である。(14)では、主語が何らかの要因となって、他者が目的語に相当するものをうみ出し、それを主語が受け取るということが含意される。つまり、主語と目的語との間に関係が生まれる要因が主語に内在しており、それが前景化しているのである。それゆえ、内在的な要因をあらわす「IC(internal cause)」という記号を付け加えることで獲得(A-AB-AL-ATP)とは区別する。また、主語自身が要因となっていることから、以下のように、主語の「行為」という要因を主語にした使役文が容認されるのである。

(15) Her behavior causes them to make a bad reputation.

(15)を認知図式であらわすと次のようになる。

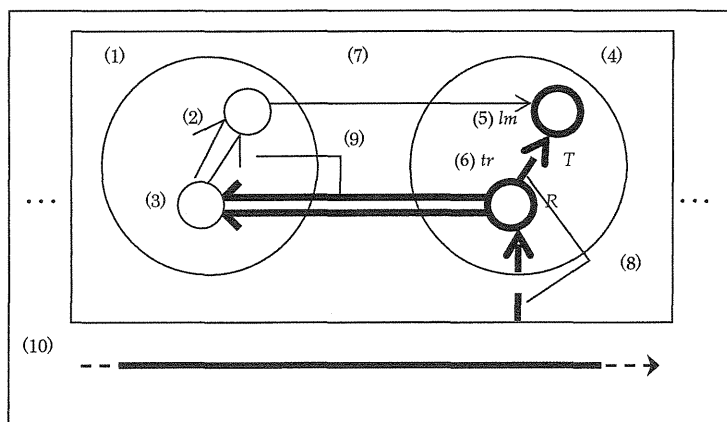


図-11

図-11において、サークル(1)はもとの所有者の支配領域、サークル(2)はもとの位置における *have* の目的語(*a bad reputation*)、サークル(3)はもとの所有者(*they*)、サークル(4)は *have* の主語の支配領域、サークル(5)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*a bad reputation*)、サークル(6)は *have* の主語(参照点ないしトラジェクター)かつアクション・チェーンの始点(要因)(*she, her behavior*)、実線矢印(7)は目的語の移動経路、破線矢印(8)はメンタルパス、二重線矢印(9)はエネルギーの流れ、実線矢印(10)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

さらに、前景化は産出(A-AB-IAL-ATP)から産出(A-AB-IAL-ATP-EC)への拡張にもかかわっている。

(16) He {has/ makes} a world record in marathon.

(17) a. She {has/ makes} an intense hatred towards birds.

b. Birds cause her to make an intense hatred.

(16)は産出(A-AB-IAL-ATP)の、(17)は産出(A-AB-IAL-ATP-EC)の事例である。(17)は、有生物主語である *she* と、抽象物である目的語 *an intense hatred* との切り離すことのできない永続的な関係をあらわしている。そして、*she* が *an intense hatred* という感情をうみ出す要因となったのが *birds* であり、それが前景化している。それゆえ、(17b)のように、原因である *birds* を主語にした使役文が容認されるのである。これを認知図式であらわすと次の図のようになる。

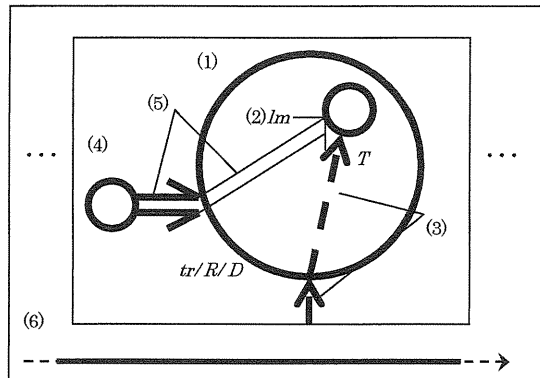


図-12

図-12 において、サークル(1)は *have* の主語かつ支配領域(*she*)、サークル(2)は *have* の目的語(ターゲットないしランドマーク)(*an intense hatred*)、破線矢印(3)はメンタルパス、サークル(4)はアクション・チェーンの始点(要因)(*birds*)、二重線矢印(5)はエネルギーの流れ、実線矢印(6)は時間のスケールを、それぞれあらわしている。

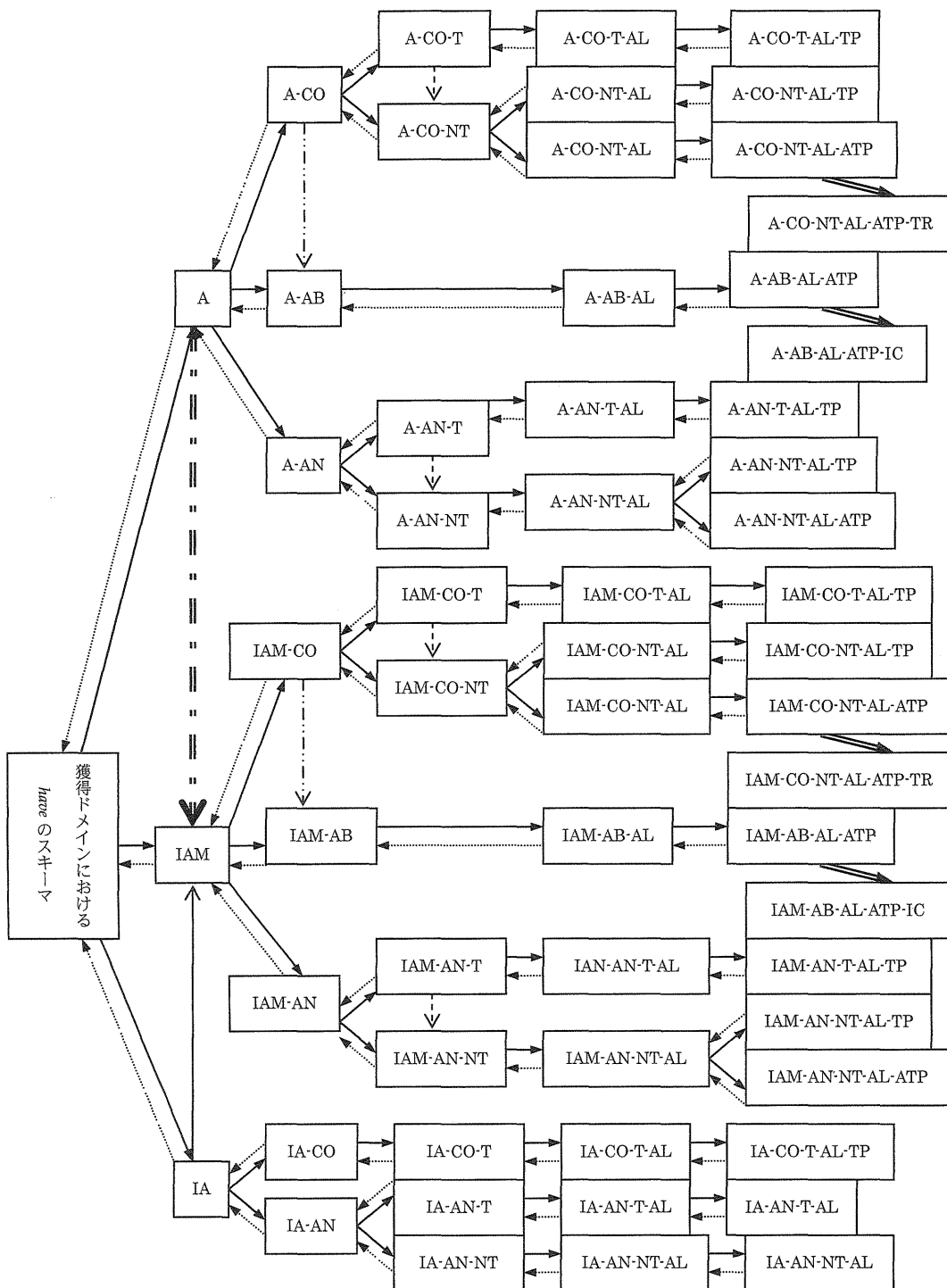
4.2.5. アクティヴ・ゾーンによる拡張

アクティヴ・ゾーンは、既存(AN)から既存(AB)への拡張、および産出(AN)から産出(AB)への拡張を動機づける。アクティヴ・ゾーンとは、存在物間にある関係をあらわす表現において、プロファイルされた関係に直接関与する領域を言う。例えば、“*We all heard the trumpet.*”(私たち皆がトランペットを聴いた)という表現において、実際に聴いたのは *trumpet* の「音」である。この「音」がアクティヴ・ゾーンである。つまり、「聴く」というプロセスに関わって実際に指示される領域のことである。同様に、アクティヴ・ゾーンは、「人」で「人間関係」をあらわすことによって既存(AN)から既存(AB)への拡張、および産出(AN)から産出(AB)への拡張を動機づけるのである。つまり、これらの事例において、主語の部分となっているのは目的語である「人」自体ではなく、その人が持つ「関係」である。

4.3. *have* のネットワークモデル

4.3.1. 獲得ドメインにおける *have* のネットワークモデル

獲得ドメインの事例をまとめると次頁に示すようなネットワークモデルになる。尚、実線の矢印(→)は具体化、点線の矢印(.....→)はスキーマ化、矢印(= ➤)はメトニミーによる拡張、矢印(---➤)はメタファーによる拡張、矢印(---➤)は主体化による拡張、矢印(==➤)は要素の前景化による拡張、実線の矢印(→)はタクソノミー関係を、それぞれあらわしている。

図-13 獲得ドメインにおける *have* のネットワークモデル

4.3.2. 「既存」ドメインにおける *have* のネットワークモデル

既存ドメインの事例をまとめると次頁に示すようなネットワークモデルになる。尚、実線の矢印(→)は具体化、点線の矢印(⋯→)はスキーマ化、矢印(⇒)はメトニミーによる拡張、矢印(→)はメタファーによる拡張、矢印(→)は主体化による拡張、矢印(●→)はアクティヴ・ゾーンによる拡張、実線の矢印(→)はタクソノミー関係を、それぞれあらわしている。

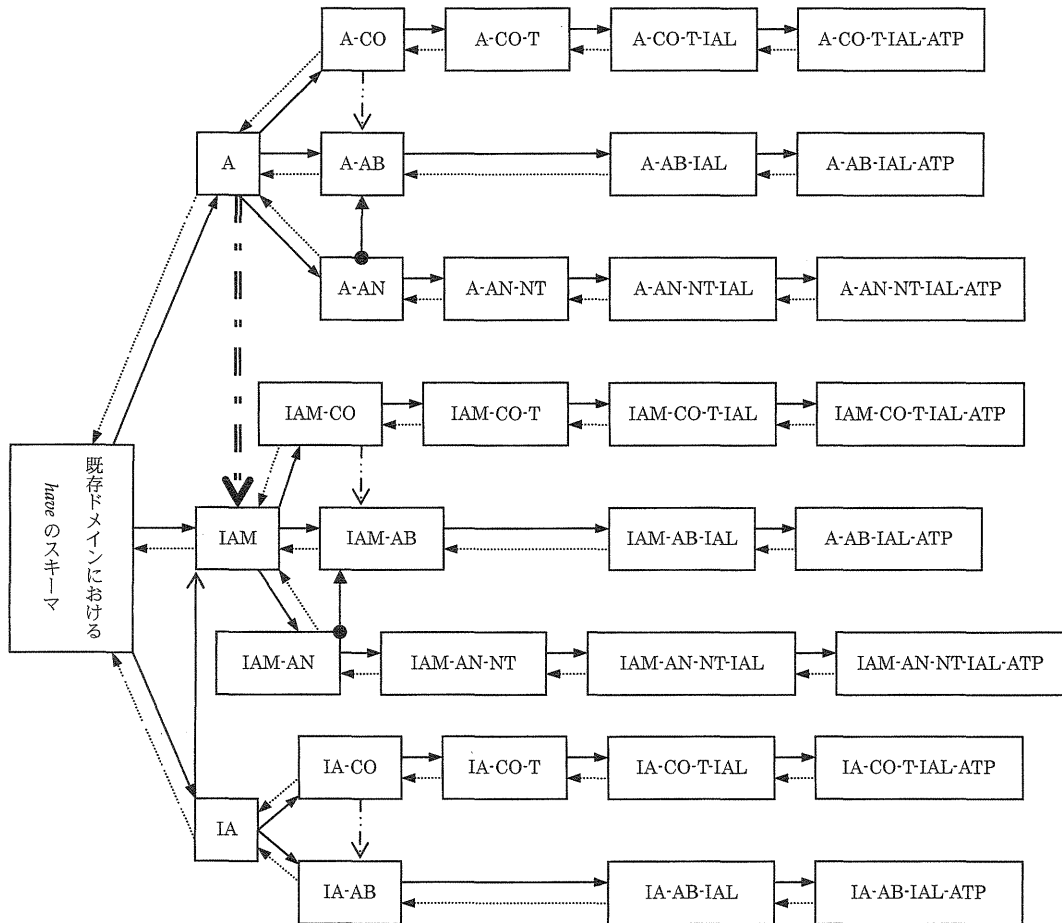


図-14 既存ドメインにおける *have* のネットワーク

4.3.3. 「産出ドメイン」における *have* のネットワーク

産出ドメインの事例をまとめると次頁に示すようなネットワークモデルになる。尚、実線の矢印(→)は具体化、点線の矢印(⋯→)はスキーマ化、矢印(⇒)はメトニミーによる拡張、矢印(→)はメタファーによる拡張、矢印(→)は主体化による拡張、矢印(●→)はアクティヴ・ゾーンによる拡張、実線の矢印(→)はタクソノミー関係を、それぞれあらわしている。

(●→)はアクティブ・ゾーンによる拡張、矢印(⇒)は要素の前景化による拡張を、それぞれあらわしている。

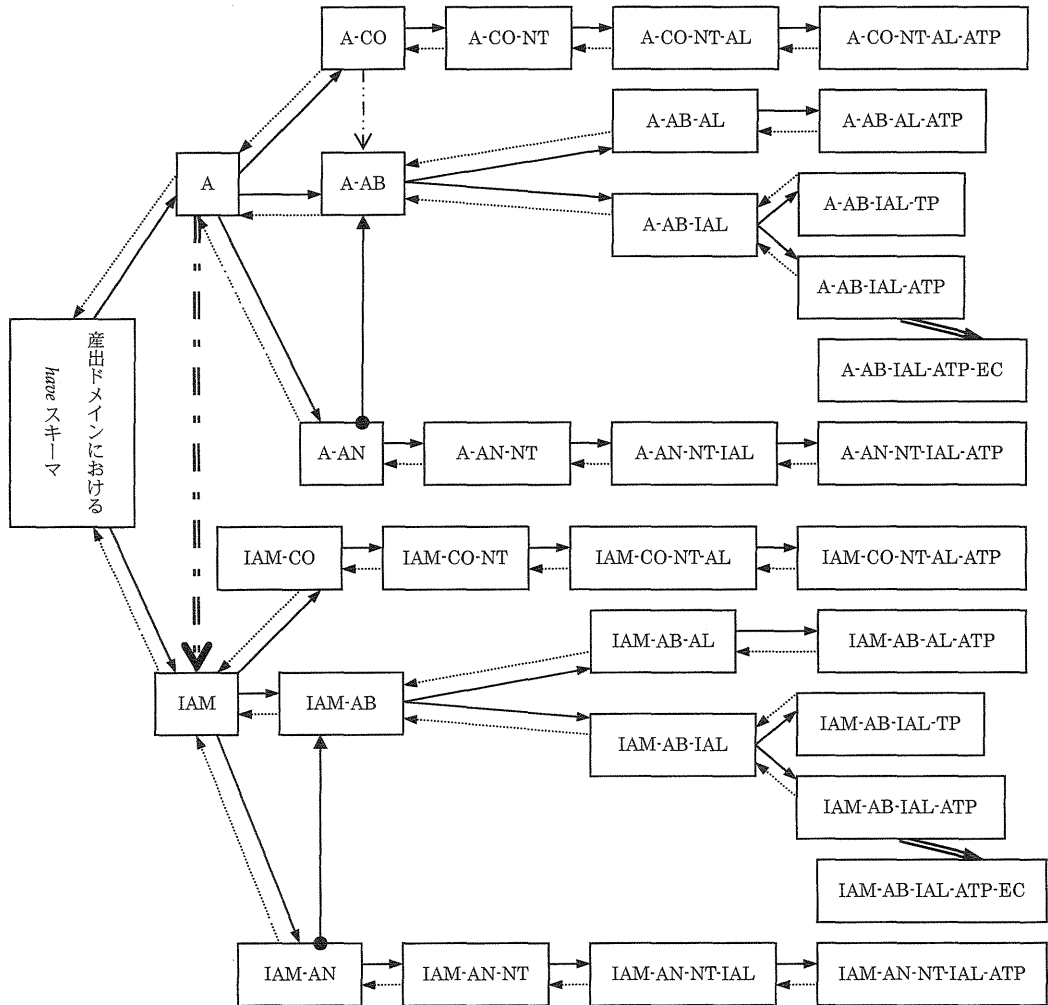


図-15 産出ドメインにおける *have* のネットワーク

4.3.4. 各ドメイン間の関係

「獲得ドメイン」、「既存ドメイン」、「産出ドメイン」の各スキーマは、Langacker(1995)が提示している *have* のスキーマの下位、つまり、サブスキーマとして位置づけられる。各ドメイン間の関係を図示したものが次の図である。

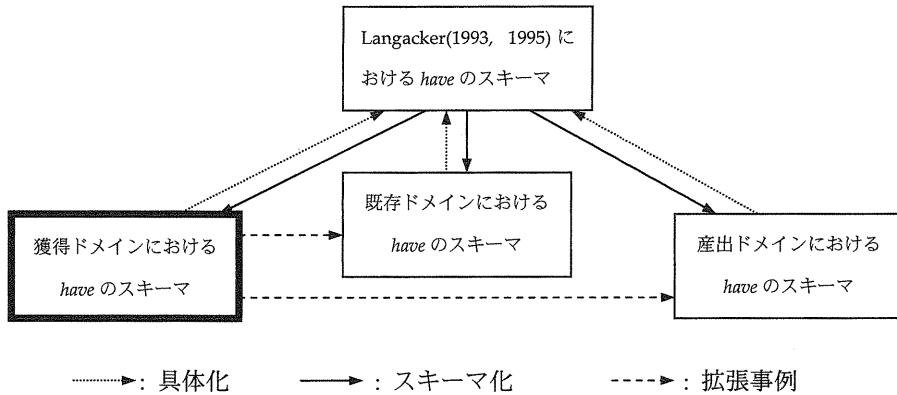


図-16

5. まとめと今後の課題

本稿では、認知言語学的な枠組みから、参照点構造を用いて英語動詞 *have* の多義性について分析を行った。本研究を通して、多義語における意味拡張は、われわれが持つさまざまな認知能力によって動機づけられており、それぞれの意味は複雑なネットワークカテゴリーを形成していることが明らかとなった。今後は、本稿での分析をふまえ、*have* におけるスコープの問題や、目的語名詞に形容詞が付加される場合と付加されない場合とでの文の容認性の問題について検討していきたい。

注

1. 本稿では、動詞派生の名詞を目的語にとる、いわゆる軽動詞用法や使役をあらわす用法については分析の対象としない。
2. 譲渡可能性とは、人や物体が切り離すことができるかどうかということであり、Fillmore(1968)や Bendix(1971)等で、所有の *have* が譲渡可能性から分類されている。譲渡可能な所有には、所有権(ownership)に関わるもの、位置関係をあらわす(locative)もの、所有対象の利用が可能な(available)ものがあり、譲渡不可能な所有には、身体的特徴(physical attributes)や精神的特徴(mental attributes)、親族関係(family relationships)がある。
3. Brown コーパスにおける本動詞用法の *have* の事例 467 例中、有生物主語・無生物目的語の組合せがあらわれるのは 229 例である。

参考文献

- Bendix, Edward H. (1971). "The Data of Semantic Description," in Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobovits (eds.) *Semantics*, pp.393-409, Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. (1993). "The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies," *Cognitive Linguistics*, Vol.4, No.4, pp.335-370.
- Fillmore, Charles. (1968). "The Case for Case," in Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*, pp.1-90, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Givón, Talmy. (1984). *Syntax: A Functional-typological Introduction*. Vol.1, Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, Talmy. (1993). *English Grammar: A Function-based Introduction*. Two Volumes, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- 早瀬尚子 (2002). 『英語構文のカテゴリー形成: 認知言語学の視点から』, 東京: 勁草書房.
- Heine, Bernd. (1997). *Possession: Cognitive Sources, Forces, and Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦 (1981). 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』, 東京: 大修館書店.
- 河上誓作 (編著) (1996). 『認知言語学の基礎』, 東京: 研究社.
- Lakoff, George. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他(訳)『認知意味論』, 紀伊国屋書店, 1993.)
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1980). *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1998). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990a). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1990b). "Settings, Participants, and Grammatical Relations," in Savas L. Tsohatzidis (ed.) *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, pp.213-238, London: Routledge.
- Langacker, Ronald W. (1990c). "Subjectification," *Cognitive Linguistics*, Vol.1, No.1, pp.5-38.
- Langacker, Ronald W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1993). "Reference-point Constructions," *Cognitive Linguistics*, Vol.4,

No.1, pp.1-38.

Langacker, Ronald W. (1995). "Possession and Possessive Constructions," in John R. Taylor and Robert E. MacLaury (eds.) *Language and the Cognitive Construal of the World*, pp.51-80, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (1999a). *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (1999b). "Losing Control: Grammaticization, Subjectification, and Transparency," in Andreas Blank and Peter Koch (eds.) *Historical Semantics and Cognition*, pp.147-175, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Miller, George A. and Philip N. Johnson-Laird. (1976). *Language and Perception*. Chicago: The University of Chicago Press.

中右実・西村義樹 (編著) (1998). 『構文と事象構造』, 東京: 研究社.

Norvig, Peter and George Lakoff. (1987). "Taking: A Study in Lexical Network Theory," in Jon Aske et al. (eds.) *BLS*, Vol.13, pp.195-206.

澤田浩子 (2003). 「所有文の属性認識」, 『言語』, Vol.32, No.11, pp.54-60.

宋昌代 (2006). 「英語動詞 *have* の多義性に関する認知言語学的考察—本動詞用法を中心に—」, 京都大学, 人間・環境学研究科 修士論文.

田中茂範 (1987). 『基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ』, 東京: 三友社出版.

田中茂範 (1990). 『認知意味論: 英語動詞の多義の構造』, 東京: 三友社出版.

Taylor, John R. (1996). *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

登田龍彦 (1991). 「Have 存在文の成立条件に就いて」, 『言語の構造と歴史』 (荒木一雄博士古稀記念論文集), pp.367-376, 東京: 英潮社.

Ungerer, Friedrich and Hans J. Schmid. (1996). *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London and New York: Longman.

山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.

山梨正明 (2004). 『ことばの認知空間』, 東京: 開拓社.

コーパス

Brown コーパス